

# つくば市中心地における歩行者専用道路の入口の特徴

趙 文琪（博士後期課程地球環境科学専攻）

- 1. 目的:** つくば市は近隣住区論 (The Neighborhood Unit)<sup>1</sup>によって計画された都市の一つだと見られている。本研究では、近隣住区論の実証研究として、つくば市中心地における歩行者専用道路の入口の特徴を明らかにすることを目的とする。
- 2. 対象地域:** 対象地域はつくば市吾妻1、2丁目、竹園1、2丁目の全部地域及び吾妻4丁目、竹園3丁目の一部を含む中心地と東大通り・西大通りの間で竹園公園から赤塚公園までのつくば公園通りである。
- 3. 研究手法:** まず、GPS 端末を用いて歩行者専用道路とその入口の位置を記録した。同時に、入口の種類と隣接する土地利用を観察・記録する。次に、ArcMap を用いて歩行者専用道路、公園、入口を全部地図化し属性を作成・分類した。また、2015年国勢調査にある人口分布の250mメッシュデータと比べて歩行者専用道路入口の特徴をまとめ、その入口の生産・生活的な機能を明らかにする。
- 4. 結果・考察:** つくば市中心地の歩行者専用道路はつくば市内各公園につながっている。公園の周りに住宅地であり、街区間に行くには歩行者専用道路が使えば行けるとみられ、車道を渡らないで済む歩車分離の設計だとされている。

対象地域内には歩行者専用道路の入口を全部161箇所収集している。その隔離措置の種類と土地利用関連の機能的な分類は表1と表2になっている。

つくばセンター周辺とつくば公園通り周辺は異なる分布がみられる。つくばセンター周辺の入口は密集的にみられ、二階と同じ標高でマンションなどの建物の二階入口と直接つながっている場合が多い。一方、公園通りの歩行者専用道路は一本道である。周辺には一戸建ての住宅地が多く、灌木の植物で隔離されても住民たちは簡単に歩行者専用道路に入ることができる。つくば公園通りに位置している研究所、会社の周辺には関係者以外立入禁止の入口が設置されているが、ほとんど防護柵で張られて入口が少ない。

入口に隣接する土地利用類型からみてその入口の機能がわかった(図1)。通学通勤よりも、買い物、銀行、郵便局、公園など生活の場としての特徴が強い。また、小学校のゲートは全部歩行者専用道路に向いているので、通学に車道を渡らないように、子供に安全で優しい環境が作られている。体の不自由な方にとってもバリアフリーの坂道を通して歩行者専用道路が利用できて、生活しやすい場所だとみられる。

### 参考文献

山本正三・高橋伸夫・中川正・橋本雄一・芳賀博文・鹿嶋洋・側島康子 1992. 筑波研究学園都市の土地利用. 地域調査報告 14: 1-8. 筑波大学地球科学系人文地理学研究グループ.

表1 歩行者専用道路入口の隔離措置の種類 (現地調査より作成)

入口で隔離措置の種類	数
バリケード	47
建物、施設などの入口ゲート	39
階段	30
バリアフリーの坂道	22
植物	9
車道側の歩道と直接つなぐ	6
段差	3
そのまま公園に入る	2
人に踏まれてからできた痕跡	2
改修工事中	1
合計	161

表2 歩行者専用道路入口と隣接する土地利用 (現地調査より作成)

入口と繋がっている土地利用類型	数
車道	40
歩道橋、トンネル	38
公園と住宅地	36
駐車場	17
生活施設	16
研究所、会社	8
小中学校、幼稚園	6
合計	161



図1 つくば市中心地における歩行者専用道路の入口と隣接する土地利用

(ArcGIS のベースマップを利用し、現地調査より作成)

<sup>1</sup> 近隣住区論は、1924年にアメリカの社会・教育運動家、地域計画研究者 Clarence Arthur Perry によって提唱された田園都市理論である。歩車分離はその特徴の一つである。